

# 暗夜の格闘

小酒井不木

青空文庫



はつきんかい  
白金塊の紛失

紅色ダイヤ事件の犯人は、意外にも塚原俊夫君の叔父さんでしたから、悪漢の捕縛を希望しておられた読者諸君は、あるいは失望されたかもしれません、これから私のお話するのは、先年来、東京市内の各所を荒らしまわった貴金属盗賊団を俊夫君の探偵力によつて見事に一網打尽にした事件です。

十月のある真夜中のことです。正確に言えば午前二時頃ですから、むしろ早い朝といった方がよいかもしれません。一寝入りした私は、はげしく私たちの事務室兼実験室の扉ドアを叩く音に眼をさしました。

「俊夫さん、俊夫さん」

と女の声で、しきりに俊夫君を呼んでいます。私が、

「俊夫君」

と言つて、隣の寝台ベッドに寝ている俊夫君を起こすと、

「知っているよ、ありや木村のおばさんの声だ」

と言つて俊夫君は大急ぎで洋服を着て、扉を開けにゆきました。

木村のおばさんというのは、親戚ではありませんが、俊夫君の家から一町ばかり隔つた所に小さい貴金属品製造工場を持っている木村英吉という人の奥さんで、俊夫君がよく遊びにゆきますから、きわめて親しい間柄なのです。

「俊夫さん、大変です。たつた今うちへ泥棒が入つて、大切な白金はつきんの塊かたまりをとつてゆきました。早く来ててください」

とおばさんは顔色を変えて申しました。

「どこで盗まれたのですか？」

「工場です」

「まあ、心を落ちつけて話してください。その間に仕度したぐしますから」

と言つて俊夫君は、例の探偵鞆しらの中なかのものを検しらべにかかりました。

おばさんが息をはずませながら話しましたところによると、昨日きのう津村伯爵家から使いが来て、伯爵家に代々伝わる白金の塊あさってを明後日の朝までに腕輪あさってにして彫刻を施してくれと頼んでいったそうです。

この白金の塊はこれまで度々盗賊たちにねらわれたものであるから、じゅうぶん注意し

てくれとのこと、おばさんのご主人の木村さんは、助手の竹内という人と二人で十二時まで仕事をし、それから竹内さんだけが徹夜するつもりで仕上げを急いでおりました。

ところが、木村さんが寢床ねどこへ入って、うとうととしたかと思うと、何か工場の方から異様な物音がしてきたので、早速とび起きて、工場の扉をあけて見ると、中は真っ暗であったが、妙な鼻をつくような甘酸あますいような臭いだったので、はっと思つて電灯をつけると、驚いたことに助手の竹内さんは細工台のもとに気絶して倒れ、白金の塊が見えなくなつていたそうです。

「すぐ警察へ電話をかけようと思つたのですけれど、夜分のことではあるし、それに、俊夫さんの方が警察の人よりも早く犯人を見つけてくれるだろうと思つたので、お願いにきたんですよ」

とおばさんは俊夫君の顔をのぞきこむようにして申した。

「おばさん心配しなくてもいいよ。白金の塊はきつと僕が取りかえしてあげるから」

十分の後、私たちは木村さんのお宅につきました。助手の竹内さんは、その時もう意識を回復して、平気で口がきけるようになっておりました。

竹内さんの話によりますと、木村さんが工場を去られてから四十分ほど過ぎた頃、突然、

外から誰かが硝子ガラスを割ったので、驚いて顔をあげると、割れ口からいやな臭いのする冷たい風がヒューツと吹いてきて、そのまま覚えがなくなってしまう、木村さんに介抱されて正気づき、初めて白金の塊のなくなったことを知ったというのです。

俊夫君はこの竹内という人を、虫が好かぬと見えて、これまで、よく私に「いやな奴だ」と申しておりましたが、今、竹内さんの話を聞きながらも、俊夫君は、時々睨にらむような目付きをして眺めましたから、私は俊夫君が竹内さんに嫌疑をかけているのでないかと思いました。

竹内さんの話を聞いてから、俊夫君は木村さんについて工場へ行きました。いやな臭いがプンとしてきました。工場は居間の隣にあつて、居間よりも一尺ばかり低く、タタキ床で、三方が壁に取りまかれた八畳敷位の大きさの室へやでして、居間とは扉ドアで隔てられております。窓は北側にあつて二枚の硝子戸がはめられ、その外側には鉄格子がつけられてあります。そして窓から二尺ばかり離れて細工台が置かれ、その上には色々の瓶や細工道具がぎつしり置きならべられ、なお三方の壁には棚がつけてあつて、その上にも、色々の瓶や化学器械がいっぱい置きならべてありました。

俊夫君は探偵靴の中から拡大鏡を出して、まず床の上をしらべました。けれど、別に手掛

かりになるような足跡などは一つもなかったと見えまして、やがて、窓の中側に落ちていた硝子片を熱心に調べ、硝子の割れ穴の大きさをはかりました。それから硝子戸をあけて格子を見ました。果たしてそのうちの二本が鑢やすりで切られ、左右へ折りまげてありました。

それから俊夫君は鬩しきいを検べ、さらに、懐中電灯を取りだして、戸外を照らしました。地面には芝生がいつぱいかぶさっていまして、硝子の破片はその上にも落ちていました。俊夫君は、何思つたか、しばらくの間その破片をじつと見つめておりました。

「なかなか気のきいた泥棒だ」

と、俊夫君は嘲あざけるように申しました。俊夫君がそういう言い方をするときには、必ず反対の意味を持つております。すなわち「気の利いた泥棒」というのは、「間の抜けた泥棒」という意味にとつて差し支えありません。

それから、俊夫君は細工台の上の物や、細工台についている引き出しの中のものはいちいち丁寧に検しらべました。次に棚の上のものも同様の熱心をもつて調べ、箱らしいものはみな蓋を取つて中を検べました。まるで白金が工場のどこかに隠されてでもあるかのように、いわば血ちまなこ眼まなこになつて捜しました。最後に西側の下の棚の上に、盆にのせた土瓶と茶碗とがあるのを見て、俊夫君は木村さんに尋ねました。

「このお茶は誰が飲むのですか」

「私ですよ」

とこのとき工場へ入ってきた竹内さんが申しました。その口のきき方がいかにも俊夫君を馬鹿にしているような口調でして、私もいささか腹がたちました。

俊夫君は土瓶の蓋を取って見ました。

「竹内さんが飲むお茶だけに、中々うまそうな色をしている」

と、俊夫君も負けてはいません。ずいぶん皮肉な言い方をした。

工場の中の検査を終わった俊夫君は、居間へ来てから木村さんに申しました。

「工場の検査はこれですみましたよ」

「手掛かりはありましたか？」

と木村さんは俊夫君の顔をのぞきこんで尋ねました。

「まだ大事な検査が残っているから、それがすまなければ何とも言えません」

「それは何ですか」

「木村さんと竹内さんの身体検査です」



「え！ わたしらがとつたと思うんですか」

「何とも思わぬけれど、検査には念に念を入れておかねばなりませんよ」

「だって、私が盗むわけもないし、竹内だってもう半年もいて、正直なことは保証付きの人間ですから、それはやられるまでもないでしょう」

俊夫君はむっつとして言いました。

「身体検査がいやなら、僕はこの事件から手を引きます。警察の人にやってもらってください」

木村さんも、竹内さんも仕方なしに俊夫君に身体検査を受けました。ことに竹内さんは嫌な顔をしました。すると俊夫君は意地悪くも、馬鹿丁寧に、竹内さんの洋服のポケットをいちいち調べました。しかし白金の塊は木村さんから竹内さんからも出てきはしませんでした。

「これで身体からだの外側の検査が済んだから、今度は中側です」

「え？」

と言って木村さんはびっくりしました。

「中側の検査とはどういうことですか？」

「白金の塊は細かにすれば飲むことができますよ。だから身体の中へ隠すことができます」

木村さんはあきれたような顔をしましたが、

「すると、腹をたち割つて検<sup>しら</sup>べるのですか」

と冗談半分に言いました。

「木村のおじさん！」

と俊夫君は真面目な顔をして言いました。

「冗談はやめてもらいましょう。僕が身体<sup>からだ</sup>の中を見たいと思うのは、見なければならぬ理由があるからです。これから駿河台の岡島先生のところへ行つて、二人の身体をエックス光線で見てもらいますから、すぐ自動車を用意してください」

俊夫君の言葉がいかにハキハキしていたので、木村さんは何も言わずにおばさんを近所の自動車屋へ走らせました。私は俊夫君の命令で岡島先生へ電話をかけました。まだ夜が明けぬ前でしたが、先生はいつ来てもよいと快く返事をしてくださいました。岡島先生は医学博士で、俊夫君が先生について医学を修めたときに我が子のように可愛がって教えてくださいくださった人で、俊夫君のことなら、どんな難題でも聞いてくださるのです。だから、

俊夫君は先生のご都合を聞かぬ先に自動車を用意させたのです。

やがて自動車がきましたので、私たち四人は人通りの少ない黎明れいめいの街を駿河台さして走りました。四人はとかく黙りがちでしたが、中でも竹内さんはにが虫をつぶしたような顔をしていました。

私は自動車にゆられながらいろいろ考えました。俊夫君が申しましたように、エックス光線にまでかけて検査するには、それだけの理由がなくてはなりません。すると木村さんが竹内さんかどちらか一人が白金を飲んでいるかもしれない。私は早く岡島先生の検査の様が見たいものと、自動車の走るのさえ、もどかしく感じました。

### 不思議なお茶

読者諸君、諸君はエックス光線で身体の内부를検査するところをご覧になったことがありますか。それを行うには検査台の上に人を立たせ、後ろからレントゲン線で照らし、前にシアン化白金バリウムの盤をあてて見るのです。

シアン化白金バリウムは、レントゲン線にあたると蛍光を発します。レントゲン線は衣

服や筋肉は通過しやすいですが、金属や骨は通過しにくいですから、これらは影となつて盤の上にあられるのです。ですからもし、木村さんか竹内さんが白金をのみこんでいたら、必ずその影が見えるはずですよ。

ところが、岡島先生が熱心に検査せられましても、白金らしい影は二人の身体に見えませんでした。

「俊夫君！ お二人とも飲んではおられないよ」

と先生は真面目な顔で申されました。

「どうも有り難うございました。それで安心です」

と俊夫君はさも安心したように、にこにこして答えました。私はすっかり予期がはずれたので、いささか失望を感じざるをえませんでした。それから俊夫君は、

「木村のおじさん、竹内さん、まことにご苦労様でした」

と身ごしらえをしている二人に向かつて言いました。木村さんは笑い顔をしていましたが、竹内さんは、それ見たことかと言わんばかりに、ムツとした顔をしていました。

「さあ、これで僕の捜索の方針が決まったから、これから大急ぎで、心当たりをしら検べに出かけます。自動車は借りてゆきますから、お二人は電車でお帰りください」

こう言ったかと思うと、俊夫君は岡島先生に挨拶して、私を引きずるように手を取って、表へ連れられました。

「兄さん、大急ぎだ。途中でパンを買って、それから木村さんの家うちへ行くから運転手に全速力で走るように告げておくれ」

木村さんの家へ行くくらいなら、二人をいっしょに連れてくればよいのに、これもやっぱり、俊夫君の竹内さんに対する反感のためだと私は思いました。

淡路町の、いま起きたばかりの店でパンを買ってから、自動車で、人通りの少ない朝の街を快速力で走りました。俊夫君は、先方へばかり気がせいっていると見えて、前かがみになって、ろくに口もききませんでした。私はとうとうたまりかねて、

「おい俊夫君！」

と呼びますと、はじめて我にかえったように私の方を向いて、ニコリ笑い、自動車のもたれによりかかりました。

「パンなど買ってどうするの？」

と私は尋ねました。

「木村のおばさんのところで朝飯あさめしを食うんだ」

「え！ 朝飯を？」

「そうよ、おばさんのうちには、おいしいお茶があるよ。竹内さんさえ喜んで飲んでるじゃないか」

私は先刻、木村さんの細工場に、竹内さんの飲むお茶の土瓶のあったことを思い出しました。

「僕もいつしよにご馳走になろうか？」

「いや、兄さんは先方へ着き次第、警視庁へお使いに行ってもらおう」

「え？ 警視庁？ では犯人の見当がついたのかい？」

「まだ何とも分からんさ。けれどもことによると大きな捕り物があるかもしれん」

と俊夫君は眼を輝かして申しました。

しばらくしてから私はまた尋ねました。

「君は先刻、エックス光線をかけにゆくにはそれだけの理由があると言ったが、あれは本気だったかい？」

「もちろんさ！」

「どんな理由？」

「それはいま言えない」

「だって二人とも白金を飲んではいなかったじゃないか？」

「そんなこと、初めから分かっていたよ」

「え？」

私はびつくりしました。二人が白金を飲んでいないことが分かっていたら、何のためにわざわざ岡島先生を煩わしたのであるのか。私はどう考えてみても了解することができませんでした。

程なく自動車は木村さんのところへ戻ってきました。物音を聞きつけたおばさんは、外へ走りだしてきました。

「俊夫さん、どうでした？」

とおばさんは尋ねました。

「二人とも白金は飲んでおりません。僕は途中に用があつたので先へ来ましたが、あとから二人は見えます」

私たちは、自動車を待たせて家の中へ入りました。

「お婆さん、竹内さんの下宿はどこでしょうか？」

「芝区新堀町一〇の加藤という八百屋の二階です」

「ちよつと、封筒を一枚恵んでください」

お婆さんが封筒を持ってきてくれると、俊夫君は、鉛筆で手帳へ何やら走り書きをしましたが、それからその頁を破つて封筒の中へ入れました。

「兄さん、これを警視庁の小田さんの所へ持って行ってください。ゆうべはたしか宿直の番だったから、それから僕は事によると十時頃までは帰らぬかもしれぬが、うちで待っていてくれ」

私が立ちあがった時、俊夫君はお婆さんに向かって言いました。

「お婆さん、僕お腹がすいたから、買ってきたパンを工場で食べさせてもらいますよ。冷たいお茶はありませんか」

「あります。先刻、沸かしたのがもう冷めておりますよ」

警視庁には果たして小田刑事がおられました。小田さんは俊夫君とは大の仲よしで、俊



夫君は小田さんのことを「Pのおじさん」と呼びます。Pは英語の Police（警察）の最初の文字だそうです。「Pのおじさん」という<sup>あだな</sup>綽名は小田さんは嫌いですが、これまで度々俊夫君に手伝ってもらって手柄をされたので、俊夫君の言うことはけっして怒りません。

小田さんすなわち「Pのおじさん」は、俊夫君の手紙と聞いてさっそく開いて見られましたが、その顔は急に輝きました。

「よろしい、万事こちらで取り計らうと、俊夫君に話してくれたまえ」と言われました。

私一人、俊夫君の事務室兼実験室の中に寂しく待っていると、九時少し過ぎに木村さんが訪ねてきました。木村さんは大切な白金の紛失のために気を弱らせたと見えて、いつもとは違つてすこぶる元氣のない顔をしていました。

「大野さん、白金が明日の朝までに帰ってこぬと、私はどうしたらよいでしょうか」と木村さんは私に向かつて、いかにも心配そうな顔をして申しました。

「まあご心配なさいませぬ。俊夫君はきつと取りかえしてくれるでしょう」

「けれど俊夫さんは私や竹内ばかりにかまっついていて、あんなエックス光線のようなむだ骨折りをさせたのですから、あの間に犯人はもう遠い所へ高飛びしてしまっただけにちがいないです」

私は、どう言っただけで木村さんを慰めてよいか迷ってしまった、黙ったままじっと考えこみました。

するとそこへ俊夫君が額に汗をにじませて帰ってきました。

「木村のおじさん、よく来てくれました。先刻は失礼しました。竹内さんはどうしましたか」

「竹内はいっしょに帰ってきてから間もなく、疲れたから、下宿でしばらく眠っていると、言っただけで帰りました」

「竹内さんは怒っていたでしょう？」

「だって俊夫さんはあんな大袈裟なことをするのですもの。私は生まれて初めてエックス光線にかけられましたよ」

「あんなものを度々かけてもらうのはよくありません」

と俊夫君は皮肉を言いました。

「で、俊夫さんはもう犯人の見当はついたのですか」

「つきましたよ」

「え？」

と私たち二人は顔を見合わせて同時に叫びました。

「犯人は誰です？」

と木村さんはいきまきました。

「まあそう、気を揉まんでもよろしい。それをお話するまえに、おじさんに振る舞いた  
いお茶がある」

「お茶ですつて？ お茶どころではないです。早く犯人の名を聞かせてください」

俊夫君はそれに返事もせず、薬品棚から一つの罎びんを取り、それを傾けて、中の液をビ  
ーカーの中へ注ぎました。それから、細い白金線を小さく切って、木村さんの眼の前に持  
つてきました。

「木村のおじさん、このお茶はちよつと変わったもので、不思議な芸当をやります。いい  
ですか、この中へこれを入れますよ」

こう言つて俊夫君が白金線の小片を液体の中へ入れると、白金はかすかな音をたてて、

見る間にとけてしまいました。

「王水おうすい「塩酸と硝酸との混合物」ですか？」

と木村さんは驚いて申しました。

「そうです。けれど竹内さんの飲むお茶はこれです」

「え？ 何？ ではあの竹内の土瓶の中は王水でしたか？ あの中へ白金がとかされてい

たんですか？ そりや大変！」

こう叫んだかと思うと、木村さんは後をも見ずにあたふた駆けだしていきました。

「兄さん僕らも木村さんの家うちへ行こう」

私たちが木村さんの家の前までゆくと、木村さんは中から駆けだしてきました。

「俊夫さん、竹内は土瓶を持って帰ったそうです。早く何とかしてください！」

「おじさん、あわてなくてもよい、兄さん、自動車を呼んできてください」

と俊夫君は落ち着いて申しました。

## 化学実験室

私たち三人は、私の呼んできた自動車に乗って、芝区新堀町の竹内さん——私はこれから竹内と呼びます——の下宿へ急ぎました。小春こはる日和びよりの暖かさに沿道の樹々の色も美しく輝いていましたが、木村さんは先へ心が急せくと見えて、あまり口をききませんでした。

自動車が目的の場所へ着くと、木村さんは逃げだすように降りて、竹内の下宿している八百屋へとび込んでゆきました。私も続いて降りようとする、俊夫君は私の腕をかたく掴んで言いました。

「兄さん降りるまでもないよ、竹内はもういない。いまに木村のおじさんが、顔色を変えて戻ってくるから待っていなさい」

しばらくすると木村さんは果たして、真つ青な顔をして出てきました。

「俊夫さん、どうしよう。八百屋のお上かみさんに聞くと、竹内は今朝けさ急に引越しをしようと行って、行き先も言わずに、荷物を持って出ていったそうです」

「おじさん、まあ心配しなくてよい、竹内の行った先はちゃんと分っているから、白金は大丈夫としかえせませす。さあこれからこの自動車で警視庁へ行きましょう」

「警視庁？」

と木村さんは眼を丸くして言いました。

「そうです、ことによると竹内はもう捕まっているかもしれない」

木村さんの顔に、はじめて安心の色が浮かびました。

自動車が芝公園にさしかかったとき、木村さんは俊夫君に向かって尋ねました。

「俊夫さんは、どうして白金が土瓶の中の王水おうすいにとかしてあることを見つけたのですか

？」

「ああ、そのことですか、それじゃこれから僕が探偵した順序を話しましょう。まず工場  
の床の上には、外から入ったらしい人間の足跡が一つもありませんでした。

それから、あの硝子ガラスの破片かけです。外から破ったのなら、中の方にたくさん破片がなくて  
はならぬのに、よく検しらべてみると、外の芝生の上に落ちていた破片の方が中に落ちていた  
破片より沢山あったのです。だから、あの硝子は中から破ったものだと言ったのです。

中から破ったものだとすれば、破ったものは竹内より他にありません。すると白金は竹  
内が盗んだにちがいないが、さて、一体どこに隠しただろうか、僕は一生懸命に引き出  
しをあげたり棚の上の器の中を検べました。

ところがどこにも見当たらず、とうとういちばんしまいにまさかと思って土瓶の蓋

をとつたら、妙な香においがぷんとしました。はっと思つて僕は考えたのです。室へやの中の麻醉剤の臭いは、この土瓶の中の液体の臭いをまぎらすためだ。白金はこの土瓶の中に隠されてある。

こう思つたけれど、あの場合それを言いだしたら竹内がどんなことをするかもしれぬ。そこで僕はおじさんに『誰の飲むお茶ですか』と聞きました。するとおじさんより先に竹内が返事をしました。だから僕はいよいよ竹内が犯人だと知つて、エックス光線をかけにいつてもらつたんです」

「え？」

と木村さんは不審そうな顔をして尋ねました。

「白金が土瓶の中にあつたなら、エックス光線をかけるに及ばぬじゃないですか？」

「それはそうだけれど……おや、もう警視庁へ来ましたよ。そのことはあとでゆっくり話しましょう」

こう言つたかと思うと、俊夫君は自動車の扉ドアをあけて、さっさと出てゆきました。

警視庁には俊夫君がPのおじさんと呼ぶ小田刑事がおられて、私たちをにこにこした顔

で迎えてくださいました。俊夫君は小田さんと二人きりで、しばらくのあいだ何やらぼそぼそ話をしておりましたが、それがすむと、ちようど昼飯時ひるめしだったので、私たちは小田さんといっしょにうどんのご馳走になりました。木村さんは相変わらざるぼんやりしていましたが、俊夫君は快活にはしやぎました。

食事がちようど終わつた時、小田刑事の部下の波多野さんが角袖かくそででふうふう言つて入つてこられました。私たちの姿を見てちよつと躊躇ちゆうちよされました。すると小田さんは、「波多野君、この人たちは、みんな内輪だから、かまわず話してくれたまえ」と言われました。

「仰せおほに従つて新堀町の八百屋を見張つておりますと、竹内は土瓶を持って帰りましたが、三十分ほど過ぎると、人力車が来まして、竹内は行李こくりとその土瓶を持って、その車に乗りました。車は品川の方をさしてずんずん走り、私は車のあとからついて走りました。

それから品川を過ぎ、大井町を通つて大森の△△まで行きました。あまり遠かつたのでずいぶん弱りましたが、ついに車は畑中の一軒家の西洋造りの家の前でとまり、竹内は行李と土瓶とを家うちの中に運び入れて車をかえしました。私はしばらくその家の様子を伺つていましたが、家の中には誰もいないように思われました。



近所で聞いてみると、誰もどんな人が住んでいるかは知らないけれど、夜分になると男が五六人集まってきては、西洋館の階下の隅にある室へやで、化学実験のようなことをするということでした。そこで私はとりあえず、品川署へ電話をかけて二人の角袖かくそで巡査にその家の見張りをさせ、ひとまず帰ってきたのでございます」

「それはご苦労様。それじゃ、やつぱり夜分でない、あげることにはできないねえ、まあゆつくり休んでくれたまえ」

と小田さんは言いました。

波多野さんが出てゆくと、小田刑事は俊夫君に言いました。

「俊夫君、いま聞いてのとおりだから、今夜七時にここで勢揃いして、八時頃にむこうに着くことにするが、その間君たちはいったん帰って、また出直してきてくれるか、それとも少し長いけれど辛抱して待っていてくれるか？」

俊夫君が木村さんに都合を尋ねると、木村さんは、竹内から白金を取りかえすまでは、うちへ帰りたくはないと言いましたので、私たち三人は警視庁に止まって、六時間ばかり待ち合わせることにしました。

待っているということは、ずいぶん骨の折れることです。こういうときに限って時計の

針の動きがいつもより遅く思われます。やがて四時になったとき俊夫君はとつぜん私に向かつて言いました。

「兄さん、僕これからちよつと用事があつて出かけてくるから、おじさんの相手をしてあげてください。六時までにはきつと帰ってくる」

こう言つたかと思うと、俊夫君は、呆氣あつけにとられた私たち二人を残して、つかつかと走りだしていききました。

退屈な時間もとうとう暮れて六時になりました。あたりは少し薄暗くなつたかと思うと電灯がつかきました。すると約束どおり、俊夫君がにこにこして私たちの室に入つてきました。

「兄さん、いまPのおじさんに会つたら、今夜は兄さんに大いに活動してもらわねばならぬから、うんとご飯をつめこんで力を貯えておいてほしいと言つたよ」

私たちが食事をすますと、時計は七時を報じました。小田刑事は、数名の腕利きの刑事を先へ送つて手配てくばりをさせ、私たち三人は小田刑事とともに、自動車に乗つて後から出かけました。

大森へ着いたときは、あたりがもう真つ暗でした。畑中の西洋館の実験室らしい室へやには、

七八人の男が寄り集まって、しきりに化学実験のようなことをやっていました。小田さんの命により、俊夫君と木村さんと私の三人が木陰に立って、実験室を覗くと、竹内もその中にいました。

間もなく竹内は得意そうな顔をして例の土瓶を取りだしてきて親分らしい男に渡ししました。親分は土瓶の蓋を取って、臭いをかぎましたが、たちまち色を変えて怒り顔になりました。彼はその土瓶を高く振りあげたかと思うと、中のお茶を竹内目がけてぱつとぶっかけました。……「あつ」と言ったのは竹内ではなくて木村さんでした。その声があまりに大きかったので、中の男たちは、一斉に私たちの方を向きしました。

その瞬間、俊夫君は呼び笛よびこを取りだして「ピー」と一声鳴りました。すると実験室の電灯がさつと消えて家の外も中も、真つ暗闇に包まれてしまいました。

それから先、何事が起こったかは読者諸君の想像に任せます。悪漢のうちのある者は家の中で、ある者は逃げだしたところを、はげしい格闘の後、張り込みの警官たちの手で捕縛されました。私も人々の間にまじって一臂いちびの力を揮い一人の悪漢を振ねじあげましたが、よく見るとそれは皮肉にも竹内だったのです。

約三十分の後、総計八人の悪漢は護送自動車の中に積みこまれました。小田刑事はうれ

しそうな顔をして、

「俊夫君どうも有り難う。この中には、警視庁で数年来行方を捜していた、稀代きだいの貴金属盗賊がいるよ。いずれゆつくりお札にゆく。君たちは、あそこの自動車で帰ってくれたまえ」

と言いながら、護送自動車に乗って去りました。

木村さんは白金を溶かした「お茶」が流れてしまったので、あまり嬉しそうな顔はしていませんでした。やがて俊夫君は木村さんを自動車のそばに引っ張って行って、

「さあ、木村のおじさん、約束どおり白金を取りかえしてあげました」

と言いながら、木村さんの手に白く光る塊を渡しました。

「やつ」

と言いながら木村さんは、つかむように受け取って、

「ど、どうしてこれが……」

「レントゲン検査に行つたのは、これを取りかえすためだったのです」

と、俊夫君は説明しました。

「ああしなければ竹内を連れだすことができませぬ。僕は岡島先生の家から一足先に帰り

おばさんに会って、朝飯を食うふりをして土瓶の中の本物をただのお茶にすりかえておいたのです。それから本物を別の罍びんにうつして、浅草の山本実験所へ持って行って還元してもらい、四時に警視庁から取りにいったんです。

先刻、盗賊の親分はあの土瓶にただのお茶が入っていたので、竹内がすりかえたものと思つて、怒つて投げつけたのですよ。……さあ早く帰つて、おばさんを喜ばせてあげましょう」



# 青空文庫情報

底本：「小酒井不木探偵小説選 〔論創ミステリ叢書8〕」論創社

2004（平成16）年7月25日初版第1刷発行

初出：「子供の科学 二巻三～五号」

1925（大正14）年3～5月号

入力：川山隆

校正：伊藤時也

2006年11月14日作成

2011年4月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 暗夜の格闘

小酒井不木

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>